

水草研究会会報

No. 3 March 1981

下総におけるガシヤモク

齊藤吉永*

東京帝大理学部の学生であった若き日の中野治房博士が手賀沼の俗に土地でチャッカラムクと呼ぶ水草を持って牧野富太郎博士の鑑定を求めたところ、日本で始めてのヒルムシロ科のガシヤモクで牧野博士はこれに *Potamogeton lucens* var. *tenganumensis* Makino と命名して1905（明治38年）植物学雑誌に発表された。

しかし、のちにガシヤモクはすでに外国で知られ *P. dentatus* Hagstr. と命名されていたものであった。

東洋では中国の青島に知られ、日本では関東の利根川流域の手賀沼、印旛沼（千葉県）、霞ヶ浦（茨城県）、多多良沼（群馬県）、西に離れて琵琶湖（滋賀県）などから報告されていた。

手賀沼では他の水草（主としてヒロハノエビモ、ササバモ、イバラモ等）と共に小舟で採り集め畑に栽培しているサトイモとかシヨウガの畦にしきこんで乾燥を防ぐと共に肥料にし、別に堆積して堆肥にも用いていた。

これほどにも多産したガシヤモクも1955（昭和30年）頃をピークに都市化の波に洗われ始めて、沼の西から汚水によって段々と影をひそめて1972（昭和47年）頃、手賀沼の東端、我孫子市都部新田と沼南町片山地先を結ぶ線の最後の自生地が消滅してしまったのであるが、その

前に手賀沼の干拓で多産地がすでに消失していたのであった。

千葉県内第2産地であった印旛沼も日本における最後のガシヤモクの自生地となりつゝあるときが、ここも周辺が千葉ニュータウンの造成と相まって人口も急激に増して沼の汚染も進み水草も激減して以前の面影は全くない。

ガシヤモクも当然このままでは遠からず消滅するのは明らかである。

筆者は目下手賀沼産のガシヤモクとササバモの自然雑種とおぼしき1株を栽培しているが、これは昨年その1部を神戸大学の角野康郎氏が研究室に持ち帰って試験されているのでいづれ精査されてはっきりすることであろうが、ガシヤモクであれば将来手賀沼に帰してやりたいし、自然雑種であればそれなりの楽しみがあるわけである。

ともかく印旛沼産のガシヤモクの保全に努力するのは勿論であるがこの個体を採って栽培して食虫植物のムジナモの如く絶滅だけは防ぎたいものである。

（1981，1，20）

* 千葉県柏市東上町1-14